

花冷えの夜、熱いお風呂に入ったとき、いつもあのときのこと…、陣痛が始まってその間隔が均等になり、いよいよ入院という時に入ったお風呂のこと、を思い出します。覚悟を決めて温かいお湯の中へ、じわじわ、ゆつくりと体を沈めていく。体が芯から温まり、つかの間のとても幸せなときでした。

陣痛の合間の、少し心が安らぐ時に入ったお風呂で、これからはこんなにゆつくりと入ることができないなと思いました。戦場へ出かける前の清めのお風呂だと思い、あと数時間後に待望の赤ちゃんに会えることを楽しみにして…。

一方、不安に押しつぶされそうなどきでもありました。どんなに泣いてもわめいても、自分が頑張らなければだれも助けてくれないからです。周りに体をさすってくれる看護師さんや、がんばれと声がけしてくれる助産師さんがいたとしても、最後は自分一人で耐えなければいけない、孤独の戦いです。実際、夫は体をさす手が止まってしまい、こつくり、こつくりとうたたねをしていて、私がこんなに苦しんでいるのにと無性に腹

新しい命に出会う

が立ちました。

けれども、陣痛の波の苦しい瞬間を何回か乗り切り、その後の大きな陣痛の波を乗り越え、我が子に出会い、抱くことができました。

幸せなことに私は、このような機会を何回か与えてもらいました。子どもによって誕生の場面が異なるため、その都度異なる誕生の感動を味わうことができました。皆、誕生の際には、人に命の大切さを教えてくれたり、感動を与えてくれたりして生まれてきたことを、知っていてほしいと思います。



*このシリーズはあなたとあなたの周りにいる人の間に温かなつながりが生まれることを願い、人権について考えるきっかけになることを目的としています。

■問い合わせ

人権啓発広報委員会
880・6569